(17) 附属幼稚園

ア　設置の趣旨（目的）及び組織

ⅰ）　本園の任務

a　先導的な幼児教育施設として

教育関係法規、幼稚園教育要領に基づき、心身の発達に応じた普通教育を実践するとともに、多様な教育課題に取り組み、地域の幼児教育を先導する。

b　教育実習園として

上越教育大学学生の教育実習（観察・参加・実習）の場として学生の指導に当たる。

c　研究園として

大学及び附属小・中学校と一体となり、教育理論及び実践に関する研究を行う。さらに、幼児教育の立場から研究・実践し、成果を広く発信する。

ⅱ）　組織

附属幼稚園は、園長、副園長、教諭３人、養護教諭、非常勤講師３人、教育補佐員（特別教育支援員）、事務職員２人、保育支援員（預かり保育担当）３人により構成される。

ⅲ）　教育目標

「元気な子ども　やさしい子ども　考える子ども」

イ　運営・活動の状況

ⅰ）　教育研究・管理運営の状況

a　教育課程改善研究の推進

令和元年度から「子どもを支える保育～評価を通して～」をテーマとした研究に取り組んでいる。

1)　研究主題

「子どもを支える保育～評価を通して～」（２年次）

2)　研究目的と内容

教師が整えた環境や行った援助が子どもにとって望ましい発達を促すようなものになっていたかどうかを評価する方法を探った。

本園では、評価を「幼児の発達する姿に照らして、教師が行う環境構成や援助が適切かどうかを振り返り、改善を図っていくこと」と捉えた。保育記録やカンファレンスの持ち方を中心に、保育を振り返り、保育を評価する仕組みについて検討を重ね、整えることを試みた。

3)　令和２年度幼児教育研究会の開催（第 28 回幼児教育研究会　10 月１日）

今年度は、コロナ禍の中、研究会をどのような形で開催するのか検討を重ねた。実際の保育や子どもの姿、園の環境を見てもらうことにこだわり、定員を 20 名に限定し日を３回（９月 16 日、25 日、10 月１日）に分けて、園を会場に開催することとした。

10 月１日のみ、公開保育、保育トーク後に、会場を大学の 301 講義室に移してトークセッションを行った。本学の吉澤千夏准教授、山口美和准教授、白神敬介准教授をパネリストに迎え、それぞれの立場から幼児教育における評価の考え方について紹介してもらい、参加者を交えて広く意見交換をすることができた。参加者からは、「コロナ禍での実際の保育場面を見ることができて参考になった」「自園でも保育の振り返りを取り入れてみたい」などの感想を得た。

4)　研究紀要の刊行

３月に令和２年度研究冊子「子どもを支える保育～評価を通して～（２年次）」を刊行した。県内の幼児教育関係施設及び機関、上越地域の小学校に配付した。

b　管理運営の状況

1)　教職員や保護者等による学校評価を生かした学校運営改善の取組

年度始めにグランドデザインを作成し、全保護者に配付した。１月には教育活動等に関する保護者アンケートを実施し、結果を保護者に公表するとともに、保護者の要望等について検討し、園運営の改善を行った。学校評議員会は令和２年７月 14 日及び令和３年２月 24 日に開催した。保育や研究の成果及び保護者アンケートの結果を示し、協議を行うとともに、コロナ禍での園運営及び新入園児獲得に向けての取組について協議した。今後の取組について様々な角度からご示唆いただいた。評議員の意見を次年度に反映させたい。

2)　教育環境の整備と安全管理の徹底

幼児の豊かな体験の場として充実した環境となるように、見通しをもち、計画的、継続的に整備を行っている。コロナ禍で新しい園生活を模索し、屋外遊びを充実させる工夫を行った。具体的には、暑い日も日陰で遊べる遮光シートの設置、園庭の遊具の工夫である。臨時休業明けの５月から 10 月中旬までは天候にかかわらず、３密を避け、毎日外遊びで過ごした。

本学学生のボランティアによる園庭整備も充実した。保護者ボランティアを依頼できなかったため、学生の手があったことで大変助かった。

3)　安全確保の取組

警察や消防署の協力を得て、火災、地震、不審者侵入等を想定した避難訓練を年６回実施した。特に東日本大震災の教訓を踏まえ、地震の震度に合わせた対応などを徹底し、引き渡し訓練も実施した。防災に関し、保護者向け緊急連絡メール配信システムを継続するとともに、緊急時に関する申し合わせを保護者に徹底した。また、保育環境の安全確保に向けた環境整備日・安全点検日は毎週定期的に設けている。さらに、 PTA 交通安全委員が中心となって、登降園の仕方や駐車場利用の約束などを徹底する活動を実施し、安全への意識啓発に努めている。

4)　本園の魅力に関する調査結果に基づいた積極的な PR 活動等

保護者アンケートにおいて、ほとんどの保護者が教育の質のよさに満足している結果を踏まえ、教育のよさについてパンフレットを作成して配布するなど、積極的な PR に努めた。令和２年度は、コロナ禍にあって園庭開放日を設けることができなかった。年間を通じて園のホームページとフェイスブックにより、随時、幼児の様子や園の様子を発信した。

ⅱ）　附属幼稚園の活性化・充実のための取組

a　保育の充実を図る取組の推進

1)　毎日の保育後に行う学級ごとの振り返りタイムや毎週水曜日に行う「水曜どうでしょう」の情報交換、研究推進委員会を通して保育改善や研修に継続的に取り組んだ。

2)　幼児教育領域教員を主とした大学教員など園外指導者の協力を得ながら専門的な見地を生かした研究や研修を進め、幼児の学びを見取る力や実践的指導力の向上を図った。

3)　幼児の学びや環境構成について履歴を集積し、保育や指導計画の改善に生かした。

b　家庭との連携を深める取組の推進

1)　登降園時や連絡帳等を活用した情報交換をはじめ、各種たより等を通して保護者との連絡及び情報共有を密にした。

2)　保育参観日と教育相談日を定期的に設け、幼稚園への理解を深める機会とした。

3)　保護者を対象とした「ふぞくフォーラム」を実施し、幼児教育の重要性や園運営について理解を図るとともに、本園の保育のよさを共有する時間となった。

c　大学・附属校との連携・協力の推進

1)　学部１年生の教育実習と学部４年生の幼稚園専修教育実習を受け入れた。

2)　幼児教育領域教員と研究協議会を行い、研究や園運営等の課題について協議した。

3)　学部生、院生のワークスタッフを積極的に雇用し、保育補助、預かり保育の補助等を行い、学生の OJT に直結させた。

4)　学部１年生のボランティアによる環境整備の体制が充実した。また、学生のサークル活動を幼児のお楽しみ会や祖父母参観日の余興として活用し、幼児と学生の双方にとって価値ある体験となった。

5)　大学教員の協力を得て、年長児と年中児を対象とした英語活動を毎月実施した。

6)　特別支援教育領域の教員から入園選考時に適切なアドバイスを受けた。さらには、支援の必要な幼児とその保護者に適切な援助や継続的な指導を実施できた。

7)　大学の施設を遠足、PTA 活動、研究会等で積極的に活用した。

8)　附属小学校１年生と幼児の交流活動を年間を通して実施し、小学校への接続が円滑に行われるよう、双方向性のある活動展開を工夫した。

d　近隣の幼稚園・保育所、教育委員会との連携

1)　上越市学校教育研究会幼稚園部会の部員に本園の研究会を公開した。

2)　上越市福祉健康部保育課から学校評議員及び研究協力者を推薦してもらうとともに、研究会参加を促した。

ウ　優れた点及び今後の検討課題等

ⅰ）　教育研究・管理運営の状況の視点から

a　教育実習の受入れについて

附属園として質の高い教育実習指導を行うことができ、今年度の反省点をもとに改善に努める。

b　大学教員との共同研究等の推進について

幼児の見取りや研修方法等に関する評価や特別支援教育等についての実践的研究を推進する。

ⅱ）　附属幼稚園の定員充足等の視点から

a　園の積極的な PR 活動等

フェイスブックやホームページ等により、当園の質の高い教育について積極的に PR する。年間を通じた園庭開放の際に、園の魅力を発信するとともに、入園志願者数の増加につながる働きかけを工夫する。

b　預かり保育の充実

これまで以上に活用しやすい預かり保育にするため、令和３年度から利用料の改訂、預かり時間の延長を行う。

c　教育相談の充実

幼児の困り感や保護者の子育てに対する不安に応じる教育相談の充実に努め、保護者が安心して預けられる保育の充実に一層の力を入れる。